

障害持つ娘の 心描く美術館

障害を持つ長女が描いた油絵を一堂に展示できる「美術館」を建設しようと、両親が資金集めや候補地探しなどに奔走している。約二十年間、描き続けた作品は約六十点上り、素材で力強い画風は数々の賞を受賞してきた。「絵を通じて生きる元気を伝えることが、娘の社会貢献につながる」として、両親は今月から個展を開催、構想実現につなげていく。

美術館建設を考えていのかかわりも難しく、情るのは東京都在住の電気 緒不安定だった。通信大助教授、阿部公輝 瑞木さんが絵に興味をさん(57)と愛子さん(53) 持ったのは、小学一年ご夫妻。長女の瑞木さん 十二歳のとき、絵画(30)は脳に障害を持つ 教室に通い始め、絵のて生まれた。会話がうまく 入り込んだ。週一回、キくできないという、周囲と ャンパスに向き合い、半

年間かけて仕上げた作品もあるという。

才能の絵 一堂に



自らの作品を個展でお披露目する瑞木さん

建設資金募る

完成させた油絵六十二点は家族や動物、草花など身近な存在が画面全体に描かれており、「生命力にあふれ、人を元気づける魅力を持った作品」(阿部さん)だ。専門家の評価も高く、障害者総合美術展での最優秀賞や、小学校の図画工作の教科書にも掲載された実績を持つ。親交が

ある本江邦夫・多摩美術大学教授は「知識ではな

く、純粋に心の底から、表現したことを描いており、これこそが絵の原点。彼女の作品にはエネルギーが宿っている」と指摘する。

美術館構想のきっかけは、個展などで「元気が出た」「純粋さをもたらした」などの声が届いたこと。阿部さんは「みーちゃん(瑞木さん)の作品が人に大きな力を与えられると思った」と振り返り、展示場所の必要性を感じたという。

そこで、昨年十月、特定非営利活動法人(NPO法人)「海から海へ」を設立した。構想では、個性あふれる美術館と命名。常設展示や、大人から子どもまで一緒に交流できるスペースのほか、アトリ

エ、障害を持つ人が生活する「グループホーム」も併設していきたいという。

もともと、建設にかかると多額の資金集めは容易ではない。既に今年十日から、夫妻はNPOの事務所の一部を開放し、十数点の作品を展示している。鑑賞は無料だが、絵に共感し構想に賛同すれば、寄付などを仰ぐ。

愛子さんは「障害の有無に関係なく、人間は皆一緒。みーちゃんの絵と向き合い、生きる元気を、勇気を持ってくれば、彼女の社会的な役割を見いだせると思う」と期待を込める。阿部さんも「二、三年を目標に、個性あふれる美術館の建設につながるならば」と意気込む。

問い合わせは同法人(☎0424・41・2958)。